氏　名（本籍）	子 安　恵 子（滋賀県）
学 位 の 種 類	修 士（看護学）
学 位 記 番 号	修 士 第 63 号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学 位 論 文 題 目	極低出生体重児を出産した母親からみた夫のサポート

論　文　内　容　要　旨

※整理番号	65	(ふりがな) 氏　　名	こやすけいこ 子安恵子
修士論文題目	極低出生体重児を出産した母親からみた夫のサポート		

研究目的

極低出生体重児を出産した母親からみた夫のサポートの構造を明らかにする。

研究方法

極低出生体重児を出産した母親を対象とした半構成的面接法を行い、KJ 法により逐語録を分析した。

結果

KJ 法により、意味のまとまりごとに単位化したラベルは 578 であり、意味内容の類似したものを集め 87 の下位カテゴリと、29 の中位カテゴリ、8 の上位カテゴリを抽出した。上位カテゴリは【私の体調を気遣い行動する】【父親として児を可愛がっている】【夫とよく話し合う】【夫の力を信じる】【夫のサポートによって精神的に落ち込まず母親としての幸せを得る】【面会に行かないので児の状態を理解していない】【児の生命への期待をもって面会に臨む】【児の面会に行くには難しい環境にある】の８つであった。

考察

【夫の力を信じる】では〔夫を頼りにしている〕〔夫を頼りにしないようにしている〕と夫の資源評価が表れており、サポートへの期待は多様であると考えられる。〔夫を頼りにしている〕では、夫婦関係における規範意識によりサポートを当然のことと受け取っており、心理的負債が少ないためサポート効果【夫のサポートによって精神的に落ち込まず母親としての幸せを得る】に影響していた。逆に【面会に行かないので児の状態を理解していない】では、不満につながることが示唆されていた。一方で夫婦関係では規範が制度化されているため、サポートの期待は相対的に大きく受け手のサポート効果は少ないか、不定的であると考えられることがある。母親は【夫とよく話し合う】ことで夫と児の状態を共有し、【父親として児を可愛がっている】ことで児を介して母親としての効力感を高めており、その結果、高い情緒的サポート効果を示していた。【児の生命への期待をもって面会に臨む】では、母親は〔毎日面会に行きたかった〕という要請があったが、母親を取り囲む環境は【児の面会に行くには難しい環境にある】であった。夫が【私の体調を気遣い行動する】は、母親の要請に適合するサポートであったため、有効なサポートとして捉えられたと考える。

総括

1.極低出生体重児を出産した母親からみた夫のサポートの構造は８の上位カテゴリに表された。

2.【夫の力を信じる】では、夫のサポートへの期待が表れていた。また、夫婦関係という規範化された関係において【夫とよく話しあう】【父親として児を可愛がっている】ことで、サポート効果が生まれていた。【面会に行かないので児の状態を理解していない】では不満につながっていた。【児の生命への期待をもって面会に臨む】【児の面会に行くには難しい環境にある】に適合した夫のサポート【私の体調を気遣い行動する】が供与されたとき有効なサポート効果が得られていた。サポー効果は【夫のサポートによって精神的に落ち込まず母親としての幸せを得る】であった。